

参考図書出版の統計的調査

Statistical Survey of Publication of
Japanese Reference Books

中 村 経 子
Tsuneko Nakamura

Résumé

In the modern library, the reference work forms the center of its all activities. The need of developing the reference work has been stressed in this country, but there are not a few problems that interrupt the healthy development. One of those is deeply rooted in the poor organization of resources of reference materials. Therefore, in this article, the writer tried to clarify the tendency of publication of reference books through the statistical examination of reference books published in Japan.

The survey is limited to those published during 1954 and 1962, and each of the findings is classified as below: (1) The number of published items of both of books for general reading and of reference books; (2) the number of reference books published each year surveyed; (3) the type of reference books in each main class of Nippon Decimal Classification (NDC) table; (4) the number of reference books published in the categories of the generalia, humanities, social sciences, natural sciences and industry; (5) comparison of change of average prices of both of books for general reading and of reference books; (6) the average price of reference books in each main class of NDC; (7) comparison of average prices of reference books and those for general reading in each main class of NDC; (8) the number of reference books of continuation type published on annual basis; (9) the number of the above type reference books in the categories mentioned above; (10) the average price of the reference books of the above type; etc.

The writer tried to make statistical survey and analysis of the above mentioned items and to prepare estimation for the future organization of the needed reference books.

(1966 graduate from Japan Library School)

序

- I. 集 計 方 法
- II. 集計結果と分析
- III. データの利用
- 結 語

序

戦後わが国に於ても、新しい図書館サービス様式導入の一環として reference work の必要性が盛んに強調されるようになってきた。これは、いわばアメリカから新しいサービス概念として日本に導入されたものとみることができるが、各種の論文でしばしば指摘されているように、日本の図書館の実情を十分に考えに入れない宙に浮いた reference work の提唱も少なくなかったのも事実である。Reference work は図書館奉仕の中心活動とまで言われるようになった現在でも、決して順調な発展をとげているとはいえない。何故わが国にあっては、アメリカに於てみられるように、この種のサービスが順調に発展しないのであろうか。両国の図書館における歴史的背景や、社会的基盤が異なるとか、有能な図書館員が足りないとか、図書館予算が不十分であるとか、数多くの阻害要因をあげることができるが、情報源が未組織の状態にあるということも、それらに劣らず、reference work の効果的な発達を妨げている大きな要因であると考えられる。

レファレンス・ライブラリアンの専門的知識と reference の技術に多少欠けるところがあっても、優れた参考図書のコレクションを持ち、それを利用することができるならば、かなりの成果をあげうるはずであるが、現状では、レファレンス・ライブラリアンが要求に応じて利用できる参考図書及び情報資料を検索するための書誌的ツールが乏しく、reference work を行う場合に大きな障害となっている。

近年にいたって、わが国の出版界でもようやく、参考図書の出版に意欲をもちはじめ、数多くのすぐれた参考図書の出版を企画するようになってきた。しかし、出版物が量的に増大するのに伴って、質的に劣る参考図書も少なくないことも事実である。

このような出版状況にあって、レファレンス・ライブラリアンがすぐれた参考図書を見定め、レファレンス・コレクションを構成することは、利用者のための情報源を揃えるために必要であるばかりでなく、自分で利用するための情報源およびツールをつくるためにも必要である。このような意図のもとに情報源に関する研究の一環として、現在の日本における参考図書の出版状況を量的に検討することは、質的な選択評価のための一つの目安を得るために意義あることと思われる。

この調査では、上述の目的にもとづいて、1954年と、

最近の1959年～1962年の5年間を調査対象年と設定し、その間に市販された参考図書を「出版年鑑」からひろい出し、参考図書の分類別・タイプ別の出版傾向を捉えようと試みた。

なお、市販の参考図書以外に官庁出版物やその他各種研究所の出版物等の市販されていない図書もある。これらに関しては、「全日本出版物総目録」を利用することによって、調査することは可能であるが、この目録は、部局別の出版物リストであるため、参考図書か否かの判定が非常に難しく、止むを得ず、非市販の参考図書は今回の調査から省略することにした。

I. 集 計 方 法

A. 資 料

「出版年鑑」東京、出版ニュース社。

1955年版、1960年版、1961年版、1962年版、1963年版。

1. 出版年鑑の収録内容

出版年鑑は、その表示年版の前1年の1月より12月までの期間中に刊行された新刊並びに重刊書を含む図書と雑誌のリストの他に、出版販売関係事項、諸統計、関係名簿、法規を収録している年刊の販売書誌である。したがって、上記資料を利用することによって、1954年および1959年から1962年にいたるまでのわが国で市販された図書の出版状況を捉えることができる。

2. 出版年鑑における一般図書の配列

配列は、日本十進分類表にしたがって、1年間に出版された図書を10分類している。すなわち、0→総記、1→哲学、2→歴史、3→社会科学、4→自然科学、5→工学、6→産業、7→芸術、8→語学、9→文学とする。なお、学習参考書および児童書はそれぞれ別類として分類されている。その分類はだいたい3桁の分類番号が与えられ、同一分類番号のものは、さらに著者名順に配列されている。但し、社会科学、自然科学、文学には4桁の分類番号が与えられていることもある。

B. 選 択 方 法

「出版年鑑」の分類番号は、上述のような粗分類の結果与えられたものであり、参考図書の各種を表示する形式区分が与えられている部分は、総記・哲学総記・歴史総記・社会科学総記・芸術・美術総記・語学総記および文学総記に限られているために、分類番号に従って参考図書を拾い出すだけでは不十分である。従って形式区分を利用して拾い出せるもの以外は、「出版年鑑」の各ペー

ジを通覧し、タイトルだけによって明らかに参考図書であると、判定できるものはタイトルより、また、タイトルだけでは参考図書であるかどうか決定が難しいものは、「日本の参考図書」¹⁾その他、参考図書の書誌類を参考にしたり、現物にあたったりして、できるだけ客観的な立場からタイプ別に分けるようにつとめた。

C. 選択の基準

本調査において参考図書とするものは、Winchell が *Guide to reference book*²⁾ で掲げている次のような4つの要件を満たす図書に限ることとした。即ち、

1. 何らかの情報を求めるために参考にされるもの。
2. 一般にその主題範囲の中においては、包括的であること。
3. 情報の扱い方については、多くの情報を要約してまとめたもの。
4. 情報を探し易くする目的をもって配列されているもの。即ち、その配列が、多くの事典や百科事典のようにアルファベット順であったり、歴史的概説のように時代順であったり、地域順であったり、書誌や技術関係のハンドブックのように分類され、体系化された配列であったりする。

それらの参考図書を、さらに弥吉光長著「参考図書の解題」³⁾ 序説においてみられる分類を基準とし、便宜的に各分野共通のタイプ11種類と、他に総記の百科事典、歴史の地図集、文学の歳時記を加え、合計14のタイプに分けた。これらの算定にあたってはあくまでも内容に従ってタイプを分けているので、例えば「出版年鑑」、「世界の名著大事典」はそれぞれ年鑑、事典とはしないで、書誌類のもとに分類している。以下に、それらのタイプをあげて分類し、参考図書のタイトルを例示して、本調査における選択の基準を明らかにしておきたい。

1. 書誌類

a) 書誌、雑誌目録及び解題

例：「世界の名著大事典」「敦煌道経目録」「社会科学文献解題」

b) 個々の蔵書目録、所在目録

例：「新収洋書総合目録」「京都大学文学部漢籍分類目録」「史料所在目録」

c) 出版目録

例：「出版年鑑」「日本総合図書目録」

d) 抄録

例： *Japan science review*

e) 文献案内

例：「科学文献のしらべ方」「有機科学文献のしらべ方」「日本史研究入門」

2. 辞典 事典類

a) 「辞典本化聖史大辞林」「便利な手紙辞典」

b) 事典

例：「語源集覧」「話し方事典」「国文学の六法全書」

c) 用語辞典

例：「農業用語事典」「時事用語解説」

d) 用語集

例：「基本単語集」「新聞用語集」「ドイツ語単語・熟語集」

3. 便覧

a) 「便覧」「ハンドブック」「ポケットブック」「要覧」「指針」などのタイトルのつくものが多く含まれる。

b) 総記以外の「……百科」

例：「クリスマス百科」「世界拳銃百科」

c) 学問研究法

例：「仏教学研究法」「地方史研究入門」

d) 参考資料

例：「最新指導要項記入資料」「日独英翻訳短文例」

e) カタログ集、材料集

例：「建具総覧」「機械集覧」「建具材料集成」「新電材要覧」

f) 概説

例：「日本の資源」

g) 「……全書」

例：「茶の湯全書」「会計全書」「葡萄栽培全書」

4. 年鑑類

a) 一般年鑑

b) 主題専門年鑑

例：「航空現勢」「日本政治経済総覧」「世界の教育」「日本国勢図会」「労働総覧」

c) 白書類

例：「図説日本の財政」「経営分析34」「都内中小企業の動向」「国民所得白書」

d) 年報

例：「新市町村状報」「経済学研究——一橋大学研究年報」「ヨーロッパ経済年報」

e) 調査統計書

例：「日本統計提要」「災害統計」「賃金構造基本調査」

5. 法規集類

参考図書出版の統計的調査

a) 法規 法令集

例：「六法全書」「スポーツ・ルール集」「薬局方」「現代世界独占禁止法令集」

b) 判例集（総合的なもの）

例：「判例総覧」「最高裁判所民法判例要録」

c) 書式集

例：「公用文の書き方・資料集」「書式全書」

d) 規格・仕様書

例：「演説・挨拶集」「'48・国際実用温度目盛」「建築材料規格集」「件名標目表」

e) 手続集

例：「会社設立手続集」

6. 図譜・図鑑類

a) 図譜（図鑑）類

b) 図譜（系統立って図を集め解説を加えているもの）

例：「図説世界文化史大系」「日本地理風俗大系」「日本史図録」「写真図説日本百年の記録」「星座神話図誌」「図説科学大系」「竹類図説」「現代建築図集」

c) カタログ集（解説が短く、図が多く入っているもの）

例：「世界の翼」「船舶写真集」「日本航空機全集」「世界の自動車」「日本の切手明鑑」「漁具図鑑」

d) 図鑑

例：「原色日本貝類図鑑」「原色作物病害図説」

e) 作品集

例：「書道名品全集」「日本絵巻物全集」「古今金工全集」「世界美術全集」

7. 索引

a) 叢書・集成索引

例：「中国随筆索引」「明代満蒙史料索引」

b) 個々の全集の別冊形態の索引

例：「世界歴史大系別巻・索引」

c) 用語索引（コンコーダンス）

例：「正法眼蔵要語索引」「奥の細道総索引」

d) 雑誌記事索引

例：「経済学文献季報」

8. 諸表

a) 年表

例：「標準世界史年表」「理科年表」

b) 一覧表

例：「整数の計算表」「高等関数表」「集成万能数表」

9. 史料集成類

例：「史料総覧」「史料近代日本史」「史料による日本

の歩み」「日本百年の記録」「日韓外交史料集成」「日本昔話集」「鉄鉱販売資料集成」

10. ディレクトリー

a) 個人名簿

例：「全国大学職員録」

b) 団体・各種施設・研究所名簿

例：「図書館総覧」「アジア諸国資料調査」「全国工場通覧」「全国炭鉱要覧」「ダイヤモンド会社要覧」

11. 人名・地名事典

a) 人名辞典

例：「世界人名辞典」

b) 地名辞典

例：「世界地名辞典」「日本地名発音辞典」

12. 百科事典

総記のうちの百科事典

13. 地図帳（個々の地図は除く）

例：「古板江戸図集成」「日本経済地図」

14. 歳時記

文学のみ

D. 除外例

1. 児童書、学習参考書、一般書籍の全分野にわたっている受験参考書などで参考図書と見なし難いもの。

例：「就職試験法律経済用語辞典」

2. 書名の下に〈実用新書〉〈入門百科〉などの叢書名のあるもの。

例：「実用園芸百科〈実用新書〉」,「家庭園芸百科〈入門百科〉」

3. 総記(000)は、便覧のうちタイトルが“……のし方”のようなマニュアル。

例：「本のえらび方読み方」「司会の方法とコツ」「新聞のつくり方」

4. 哲学(100)のうち、

a) 148 の相法、占い、運命判断の全て。

b) 159 の辞典以外のものの全て。

5. 歴史(200)のうち、

a) 地図集の中で、日本のものは、日本全域より小単位の地域を対象とするもの。

例：「東京風土図」「東京都地図地名総覧」

b) 道路地図

c) 旅行案内書

6. 社会科学(300)のうち、

a) 法解釈集、判例研究

- b) 「法律解釈総覧」「判例研究叢書」
 c) 「入学受験用の学校案内」「東京各種学校案内」
 d) 「エチケツト事典」
 7. 自然科学 (400) のうち、
 a) 一般写真集 (一定の順序に従って配列されていないもの)
 例: 「カメラ動物記」
 b) 実験法
 例: 「生物実験法」「有機化学合成実験法」
 8. 工学, 工業 (800) のうち、
 a) 「新案特許集報」
 b) 設計図集
 例: 「医院病院建設図集」「家の設計図集」但し、
 「……史図集」の類は図譜に入れた場合もある。
 c) 自動車運転試験に関するもの。
 例: 「自動車運転早わかり」「自動車受験法規集」
 d) 家事 (590) の全て。
 9. 産業 (600) のうち、
 小主題の図譜, 図鑑で特殊すぎるとされるもの。
 例: 「接木挿木繁殖図説」「果樹栽培の一年」
 10. 芸術 (700) のうち、
 a) 個人作品集
 b) 娯楽 (790) のうち、茶道関係以外のもの全て。
 11. 語学 (800) のうち、
 a) 3 のマニュアルと同様なもの。
 例: 「正しい挨拶と話し方」
 b) 就職, 受験用のもの。
 例: 「就職語辞典」「就職・受験用語」
 c) 同一辞書に各版型がある場合の縮冊版, 特製本, 小型版。
 例: 「漢和新辞典——縮冊版」「新漢和辞典——皮製」
 「新漢和辞典——小型版」
 12. 文学 (900) のうち、
 a) 文学入門書
 例: 「文学入門」「ヨーロッパ文学入門」
 b) 注釈書
 例: 「万葉集注釈」「堤中納言物語全註解」
 c) 研究書
 例: 「万葉集の民俗学的研究」「近代詩集の探究」「ヘミングウェイ研究」

II. 集計結果と分析

A. 一般図書と参考図書の出版点数 (新刊書のみ)

参考図書が少ないために, よい reference work ができないとか, reference work をするのに時間がかかるとかいわれる。既存の参考図書はともかくとして, 年々出版される参考図書の冊数を算定し, 一般図書の出版量と比較するならば, 日本で出される参考図書の相対的な量を把握することができる。このような意図のもとに, 上述の基準にしたがって, 参考図書を算定したところ, 第1表のような結果が得られた。

第1表 一般図書と参考図書の出版点数

出版 年別	出版 点数	一般図書 出版点数 ^{注1)}	R. B. 出版 点数 ^{注2)}	R. B. 出版率 ^{注3)}
1954		8,132	647 (16) ^{注4)}	8.0%
1959		10,459	925 (40)	8.8%
1960		9,364	910 (16)	9.7%
1961		9,513	915 (5)	9.6%
1962		9,577	873 (7)	9.1%

注1: 一般図書出版点数は, 出版年鑑の統計の新刊図書出版点数の0-9の合計から, その年の参考図書の出版点数を引いた数字を示す。

注2: R. B. とは参考図書のことである。

注3: R. B. 出版率は, $R. B. \text{出版点数} / (\text{一般図書} + R. B. \text{出版点数}) \times 100$ で算出したものである。

注4: R. B. 出版点数の()内の数字は, 定価表示のない図書および非売図書の冊数を示す。

第1表によれば, 1959年は一般図書の出版点数の増加に伴って, 参考図書のそれも例外的にやや点数が多くなっているが, その他の年は平均して, 一般図書も参考図書もそれぞれ点数が増加しつつある傾向を認めることができる。殊に参考図書出版率は, 一般図書の場合よりも, 高率を示しはじめていることがわかる。1~2年だけでは, その増減のはっきりした傾向はつかめないが, 1954年を加えた5年間の推移をみると, 全体的傾向としては, はっきりと1954年以来, 参考図書が増加している事がうかがえる。

B. タイプ別参考図書の年間出版点数

第2表は参考図書の14のタイプ別に, 5年間の出版点数の統計をとったものである。この統計作成にあたっては, 14の種類の中にあてはめるのに不適当に思われるものも数多く出ているが, 一応, すでに述べた選択の基準にしたがって区分を行なった。特に, ディレクトリー, 史料集成類については異論があると思う。

参考図書出版の統計的調査

第2表 タイプ別参考図書の出版点数

年別 タイプ別		1954	1959	1960	1961	1962
書	誌	44	41	48	43	61
辞	典	156	172	193	160	145
百	科	4	4	6	8	6
便	覧	118	210	230	208	235
年	鑑	97	180	160	151	154
法	規	56	111	94	89	76
索	引	4	13	4	3	6
図	譜	94	102	73	107	65
諸	表	15	29	23	31	31
史	料	15	18	42	60	45
ディ	レ	23	29	25	46	37
人名・地名	辞典	15	4	6	7	7
地	図	3	7	4	1	3
歳	時	3	5	2	1	2
合	計	647	925	910	915	873

第2表によれば、点数の高い上位の参考図書のタイプ、即ち、便覧・辞書・事典・年鑑などは、毎年殆んど一定している。中間的な点数を示しているものは、図譜・図鑑類・法規集・書誌などであるが、これらは全般的に各分野に平均して出されているものではなく、図譜類は歴史、芸術に、法規集は社会科学に、書誌は総記に集中して現われている。逆に非常に点数の少ないものをみると、歳時記・地図集・百科事典・索引・人名・地名辞典がある。これらは毎年ほんの数点しか出ていない。この様にわずかな点数のものの場合、特定の分野に限られているものがある。例えば歳時記は文学のみに、地図集は地理歴史に、百科辞典は総記のみに限られている参考図書といえる。しかし、索引だけは、点数は1～2点であっても、分野に関係なく各主題にわたって出されているタイプである。これに較べて、やや点数の多いものとして、ディレクトリー、史料集成、諸表が数10点、多い年は60点、少ない年は15点前後出ている。

C. 分類別にみた参考図書のタイプ

参考図書には、主題によって特徴的なタイプがある。NDCの十区分のそれぞれにどのようなタイプの参考図書が多いかを明らかにするために調査した結果が第3表である。以下にそれぞれの分類に属する参考図書の特徴的なタイプをこの表にもとづいて概観してみたい。

1. 総記 (000) の特徴

出版年鑑はNDCに従って図書を配列しているの、当然次のようなタイプの参考図書が集中する。第3表A～Eをみると、当然のことながら毎年書誌(販売書誌・文献目録・総合目録 etc.)と一般年鑑、百科事典が集まっている。特に書誌が毎年30点余り出されているのが目立っている。

2. 哲学 (100) の特徴

特徴的に現われる資料のタイプは殆んどみられない。この分野は参考図書の総冊数の面からみても他に較べて点数が少なく、多い年でもせいぜい22点位で終わっている。敢て特徴と思われるものを求めるならば、辞典・事書類がやや多くなっている程度である。しかもそのうち重刊のものが5割程度あること、また便覧類の形式をとる参考図書が非常に稀なことぐらいではなかろうか。これらの現象は、この100台の学問分野自体の特徴をそのまま反映しているものとみることができる。即ち、哲学・倫理・宗教等においては、他の自然科学や社会学や産業とは違って、年ごとに学問的に顕著な進歩がみられるとか、研究法が変更されるということがないからである。また、100台では参考図書の寿命が長いということを反映して、重刊書が出される率も高い。これらの分野では、基本的な参考図書さえ備えられているならば、あまり新しい参考図書を必要としない分野であるともいえる。

3. 歴史 (200) の特徴

表3-Aは例外としても、その他では、図譜の多いが目立っている。近年、出版技術が向上したことに伴って、各社が競って「図説世界文化史大系」「日本地理風俗大系」等の大部のものを編集し、図譜を主体とした参考図書を多く出しているところに特徴がある。また、数は限られているけれども人名辞典、地名辞典、年表、史料集成、地図集などが毎年平均して出されている。哲学の場合にみられた特徴と同じように、この分野においても、その研究の進捗状況は、他分野と比較すれば、あまり急速ではないといえる。また、年鑑や便覧にも目立つものはあまりみられない。

4. 社会科学 (300) の特徴

法規集、年鑑、白書、調査統計、年報、便覧などのタイプのものが非常に多く、それに次いで、辞典、事典類、ディレクトリー、史料(資料)集成が多い。この300台は、総出版点数からみても、毎年1番顕著な増加を示している。しかも後述するように価格の面からみると、毎年他の分野に較べて1番安いという点に大きな特徴があ

第3表 参考図書のタイプ別出版点数

A. 1954年

タイプ別	分類別	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
書	誌	20(15)	2	2	3(2)	7(4)	5(2)	1(1)	2		2
辞	書		7	8	21	24	7	12	19	47(11)	11
百	科	4									
便	覧	2	3	4	23(7)	23(2)	31(5)	22(4)	6	3	1
年	鑑	18(17)	1	3(3)	37(37)	1(1)	11(11)	13(12)	11(11)	1(1)	1(1)
法	規	3	1		35(15)		7(3)	7(2)	2(1)	1	
索	引	1	1			1				1	
図	譜	1		5	2	21	3(2)	8	54		
諸	表			5	1	1	4	2	1		1
資	料			5	1		2	1	6		
資料集成											
ディレクトリー		1		6(4)	7(6)	1	3(3)	5(5)			
人名・地名辞典				11					4		
地名集				3							3
歳時記											
合計		50(32)	15	52(7)	130(67)	79(7)	73(26)	71(24)	105(12)	53(12)	19(1)

B. 1959年

タイプ別	分類別	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
書	誌	21(11)	2	1	1(1)	4(3)	8(7)	1(1)	1		2(1)
辞	書	1	4	12	32(2)	11	22	7	33(1)	48(6)	2
百	科	4									
便	覧	3	5	4	65(9)	17(1)	60(15)	34(8)	7	12	3
年	鑑	24(24)	2(2)		71(62)	7(7)	33(32)	28(28)	13(13)	1(1)	1
法	規	1			79(27)	1(1)	19(5)	8(5)	2(1)	1	
索	引		1	2	3	2				1	4
図	譜			32(1)	3	17	5(1)	17	28		
諸	表			2	5(1)	7(1)	7	2(1)	4	2	
資	料			1	16(4)			1			
資料集成											
ディレクトリー				6(4)	4(3)		10(6)	8(7)	1		
人名・地名辞典				4(2)							
地名集				7(2)							
歳時記											5
合計		54(35)	14(2)	71(9)	279(109)	66(13)	164(66)	106(50)	89(15)	65(7)	17(1)

参考図書出版の統計的調査

C. 1960年

分類別 タイプ別	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
書 誌	26(15)	1		7(5)	5(4)	7(4)	2			
辞 書		3	10	33(3)	23	29(1)	4	30(1)	52(6)	9
百 科	5	1								
便 覧	2	1	1	49(15)	36(3)	79(9)	38(10)	15(1)	8(2)	1
年 鑑	31(23)	3(3)		57(53)	7(7)	17(14)	28(25)	9(9)	1(1)	7(7)
法 規 集				52(29)	1	29(9)	8(3)		4	
索 引		2	2							
図 譜			13	5	18	2	10	25		
諸 表	2		2	3	5	4	5(2)	1	1	
資 料 集 成			11	16	2	4(1)	7(1)	1		1
ディレクトリー			2(1)	10(8)	1(1)	2(1)	9(8)	1(1)		
人名・地名辞典			5(4)							1
地 図 集			4							
歳 時 記								1		1
合 計	66(38)	11(3)	50(5)	232(113)	98(15)	173(39)	111(49)	83(12)	66(9)	20(7)

D. 1961年

分類別 タイプ別	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
書 誌	28(19)			6(2)	4(3)	2(2)	1(1)			2
辞 書	1	3	7	22(5)	18(2)	18(2)	12(1)	28	47(5)	4
百 科	8									
便 覧	1	2(1)	1(1)	40(8)	35(9)	77(10)	35(8)	9(1)	5(1)	3
年 鑑	38(28)	1(1)		49(40)	7(5)	25(24)	19(16)	9(9)	1(1)	2(2)
法 規 集	2			42(30)	5	28(8)	10(2)		2	
索 引		1	1				1			
図 譜			17	3	19	2	14	52		
諸 表		2	3	3(1)	10(2)	4	5(2)	2	2	
資 料 集 成			11	29(3)	1	16	2			1
ディレクトリー	1(1)		6(5)	9(7)	2(2)	15(6)	10(9)	1(1)		2
人名・地名辞典			6(2)							1
地 図 集			1							
歳 時 記							1			
合 計	79(48)	9(2)	53(8)	203(96)	101(23)	187(52)	110(39)	101(11)	57(7)	15(2)

E. 1962年

タイプ別	分類別	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
書	誌	31(16)	3	2	11(6)	5(3)	6(6)	1(1)	2(1)		
辞	典	2	10(3)	5	25(2)	18(1)	21	11	8	40(5)	5
百	科	6									
便	覧	2	3	3	69(13)	35(5)	70(9)	34(9)	12	5(1)	2
年	鑑	30(25)	3(3)	2(1)	48(45)	8(7)	22(21)	27(24)	10(10)	2(2)	2(2)
法	規	1			59(36)		9(6)	2(2)		5	
索	引		2	2			1	1			
図	譜			14		12	2(2)	3	33		1
諸	表			7	6(1)	7(2)	4(1)	4(1)	3		
資	料	1	1	10	27(1)				2(1)	2	2
ディ	レ	1(1)		5(2)	11(10)	1(1)	6(5)	9(9)	3(3)		1(1)
人名・地名	辞典			6(4)	1						
地	図			3(1)							
歳	時										2
合	計	74(42)	22(6)	59(8)	257(114)	86(19)	141(50)	92(46)	73(15)	54(8)	15(3)

注：（ ）内の数字は年刊参考図書の点数を示す。

る。自然科学，工学関係の図書の約半値以下であることが，この分野の参考図書の利用を促している。またその回転率の高いことも，新しい図書の出版を促す原因となっている。出版点数が多量でしかも価格が安いということは，比較的少ない予算で数多くの参考図書を購入できる利点であるが，同時に特徴のない類書がやたらに多いことも注意しなければならない。総点数の25%が年鑑類，他の25%が法規集であることは，どちらも継続的に出版される種類のものであるから，参考図書のコレクションをつくる図書館としては，一旦購入すると決めたならば，それらを毎年継続購入しなければ，up-to-dateの資料を確保していく事ができないために，この分野に多くの予算を割当てて必要が生ずるようになってくる。一般に，自然科学，工学，産業は研究・技術の進展の度合が速く，図書館としては，それに追いついていくために相当多額の予算配分を必要とすると広く理解されているが，社会科学のうちでも，特に法律，経済については，相当のスピードと予算をもって参考図書の選択収集を行わなければならないわけである。

5. 自然科学 (400) の特徴

事典，便覧，図鑑が多く，仕様書，規格等や名簿類が

殆んどない。年鑑，諸表が中間的位置を示している。便覧の中には，データ・ブックや「有機化学命名法」等を含み，科学分野の研究者や学者や学生が実験や研究中に，常に座右に置いて使うような種類のものが多い。図鑑は，植物・動物の各種のもので体系的なかたちをとるもので，重版が新刊書の2倍以上の点数を示していることは，この分野の出版物の着実な全体的特徴を表わしている。

6. 工学 (500) の特徴

便覧，年鑑，辞典が多く，'59年と'60年とには法規集が多く出されている。便覧の中では，材料集やデータ集のような実務家（エンジニア）のマニュアルとしての性格を持つものが主体となっている。年鑑類では，諸工業の概況を調査報告する白書あるいは年報とよばれるものが主となっている。辞典の場合をみると，専門用語辞典が，'62年には辞典類の26%弱，'54年は半分以上になっている。表3-A，Eをみると，法規集は，'54年と'62年に僅かしか出ていないのに比して，表3-B，Cの'59年，'60年には，まとまって出ているので，全体的傾向をとらえることは困難である。法規集の内容を詳細に検討すると，この2年間に，まとまって「材料規格」や「土地区画整

参考図書出版の統計的調査

理関係法令集」「建築関係法令集」等が数多く出されている。

以上の事から、相当変化のはげしい500台の分野でも基本となる参考図書はある程度備えておけば、その後は便覧と年鑑類を中心として補充すれば、コレクションをup-to-dateに保つことができるといえる。

7. 産業 (600) の特徴

主なタイプのもは便覧、年鑑、辞典、図譜などで、これに次いで名鑑(directories)が多い。索引、史料(資料)集成は非常に少ない。便覧は重刊のものが、毎年5割弱刊行されているにもかかわらず、それに加えて、毎年新刊のものも数多く出されている。年鑑類としては白書、年報が主体となっている。図譜が多くなっているのは、体系化され図説になった図書が多いため、図鑑のような事典的要素の少ないもの、例えば「図説日本産業体系」のようなものがかなりある。ディレクトリーは社会科学に次いで、この分野で多くみられる。例えば「ダイヤモンド会社要覧」等の株式関係のものが多い。

8. 芸術 (700) の特徴

多いものは図譜、事典、年鑑、少ないものは書誌、法規集、索引それに便覧が数点出ている程度である。美術関係の図録集、全集とか、音楽関係では曲の解説を体系的に行なっている事典が多い。年鑑は「レコード年鑑」「PR年鑑」「スキー年鑑」等のもので、同じ年鑑類でも自然科学や産業の年報や白書等のように、統計書の色彩が強くなり、これらとは相当性格の異なる種類のものである。

9. 語学 (800) の特徴

辞書、特に「ことば典」が非常に多いことはいうまでもないが、それ以外のものは殆んどみられない。

10. 文学 (900) の特徴

この分野に属する参考図書は非常に僅かしか出版されないことが特徴であるといえよう。毎年、事典、便覧、歳時記、索引が数点あるにすぎない。

D. 主題分野別参考図書の出版点数

NDCによって10区分された出版年鑑の各類を便宜上次のようにまとめ、5つの主題分野とした。即ち、0→総記、1・2・7・8・9→人文科学、3→社会科学、4・5→自然科学、6→産業である。しかし、このような5つの区分は必ずしも截然とした区分原理にしたがったものではない。例えば、実際上区分するのが困難な部門は600の産業である。なぜならば、産業の中には、自然科学分

野に入れられるものと、社会科学分野に入れられるものとが混入しているからである。

第4表 主題分野別・参考図書の年間出版点数

年 別 主題別	1954	1959	1960	1961	1962
総 記	50	54	66	79	74
人文科学	244	256	230	235	223
社会科学	130	279	232	203	257
自然科学	152	230	271	288	227
産 業	71	106	111	110	92

1. 自然科学

1954年に比べ、6年後の1960年には出版点数が約1.5倍に増えているのが著しい特徴である。1954年～1959年の頃のこの分野の参考図書は、人文科学よりも出版点数が少なく、1959年には社会科学よりも同様に少なかったものが、1960年からは、他の主題分野を全く退けて急激な増加傾向を示している。だがそれ以後、出版点数の伸びがみられないのは、一応この分野の参考図書の年間出版点数の限度はこの程度とみてよいのではなかろうか。しかし、他の分野と比較すれば、依然として高い出版率を維持していることがわかる。

2. 社会科学

1954年と1962年の出版点数を比較すると、後者が約2倍の点数になっている。その間の推移をみると、大体自然科学の分野と類似の出版傾向を示しているとみることができる。タイプの面に目を向けてみると、1962年の出版点数は、便覧、年鑑類、法規集、史料集成の場合について見れば、1954年の2倍になっている。

3. 人文科学

この分野の出版点数は、コンスタントに200点台を示し、かえって、次第に年間出版点数が減少する傾向にある。しかし、この分野の出版点数と他の主題分野のそれを比較した場合に、1954年には、他の分野以上に、参考図書を出していた分野であったが、1959年以後は、他の主題分野、特に自然科学に位置を入れ代られ、全体からみると、2位ないし3位の点数にとどまっている。

4. 総記・産業

この両分野は、前述の様にNDCの番号を機械的に主要主題3分野にあてはめたために、あとに残った、いわば異分子であるが、レファレンス・コレクションを構成するためには、この分野が基礎となり、附加されるべき領

域である。どちらも出版点数が少ないため、他の主題分野のように出版傾向というものは捉えることができない。

E. 一般図書と参考図書の平均価格

各年とも、一般図書の価格が年々高くなっていくのと同様に、参考図書の価格も上ってきている。しかし、その上昇率は、1954年に比べて1961年、1962年の方が高くなっている。第5表の「R. B. 価格率」をみると、1954年に2.4倍弱であったものが、1961年には、2.1倍強として1962年には、2.2倍弱と高くなっている。実際の値段をみても、1954年の746円から、8年後には1,420円と、約2倍近くの値段になってしまっている。一般図書についてもいえることではあるが、参考図書の価格が1961年と1962年との間に、急激に高くなっていることが目立った現象である。このことから推して考えると、参考図書の価格は年々割高になっているが、内容もそれに伴って充実したものとなって刊行されていることが伺える。

第5表 一般図書と参考図書の平均価格

年	一般図書 平均価格 ^{注1)}	R. B. 平均価格	R. B. 価格率 ^{注2)}
1954	317円	746円	2.4倍弱
1959	412円	873円	2.1倍強
1960	441円	917円	2.1倍弱
1961	516円	1,107円	2.1倍強
1962	652円	1,420円	2.2倍弱

注1：一般図書平均価格は、出版年鑑の統計から得た数字であるため、参考図書、児童図書、学習参考書を含めた平均である。R. B. 平均価格は、無定価図書は除いて平均価格を割り出してある。

注2：R. B. 価格率は、参考図書の平均価格 / 一般図書の平均価格である。

安価な参考図書の分野は、総記(000)、社会科学(300)、語学(800)であり、殆んど500円～1,000円

F. 分類別参考図書の平均価格

第6表は、5年間に出版された参考図書をNDCの十進分類に従って分類した上で、参考図書の合計金額 / 参考図書の出版点数（無定価図書を除く）で割り出したものである。年間平均参考図書の定価は、全分野の合計金額 / 参考図書の全出版点数（無定価図書を除く）で出したものである。

第6表によれば、

- (1) 各年を通じて一番高価な参考図書が出されている分野は歴史(200)類である。
- (2) 各年を通じて価格の高さによって順位をつけてみると、5位までに常に入っている分野は、自然科学(400)と工学(500)である。1959年以後の平均価格は870円以上で年々上昇している。1962年には、自然科学は1,425円、工学は1,935円で、特に工学分野の参考図書の価格が急騰している。
- (3) 各年を通じて、常に6位以下の

第6表 分類別参考図書の出版点数と平均価格

年 分類別	1954	1959	1960	1961	1962
0	50(32) ^{注1)} 631 ^{注2)}	54(35) 632	66(38) 339	79(48) 657	74(42) 845
1	15 677	14(2) 1,314	11(3) 1,660	9(2) 894	22(6) 1,227
2	52(7) 1,318	71(9) 1,566	50(5) 1,894	53(8) 1,796	59(8) 2,939
3	130(67) 640	279(109) 542	232(113) 631	203(96) 759	257(114) 1,115
4	79(7) 892	66(13) 1,315	98(15) 1,376	101(23) 1,649	86(19) 1,425
5	73(26) 679	164(66) 1,158	173(39) 1,142	187(52) 1,586	141(50) 1,935
6	71(24) 523	106(50) 880	111(49) 660	110(39) 901	92(46) 1,169
7	105(12) 997	89(15) 748	83(12) 1,059	101(11) 1,096	73(15) 1,516
8	53(12) 377	65(7) 668	66(9) 775	57(7) 546	54(8) 517
9	19(1) 449	17(1) 712	20(7) 405	15(2) 1,246	15(3) 1,727
合計点数 年間平均価格	647(188) 746	925(307) 873	910(290) 917	915(288) 1,107	873(311) 1,420

注1：各欄の上段は点数、下段は平均価格を示す。

注2：()内の数字は無定価図書の点数を示す。

参考図書出版の統計的調査

の間である。しかし、社会科学は、近年価格が他に比べ大きく上り、1962年は、1,115円になっている。

(4) 産業 (600) と文学 (900) は毎年非常に低い価格を示しているが、年によっては2倍以上の高価になることもあり、不安定である。しかし一般的には、やはり近年相当高くなっている。

(5) 哲学 (100) は、1954年～1960年の6年間に急激な価格の上昇を示していたのが、1961年には急に低下し、 $\frac{1}{2}$ 強になっている。価格は1960年がピークでそれ以後は、平均価格以下になっている。

G. 分類別にみた一般図書と参考図書の平均価格の比較

第7表によれば、全般的にみて参考図書の価格は一般図書よりかなり高い。しかし例外的に1960年の000台、1962年の800台だけは、一般図書が参考図書より高くなっている。これら2つの例外は、すべて自然科学や社会科学ではない分野であり、相当大部なセットものの一般

図書が出されたために起った現象であると思われる。自然科学分野では、一般図書よりも参考図書が安いということは殆んどありえない。以下において、更に詳しく分析を行なってみたい。

1. 総記 (000)

他の部門に較べて、参考図書と一般図書との差が少ない。1954年と1962年を較べても、大した差がない。どちらも200～300円の差額があるが、むしろ1960年のように、参考図書の方が一般図書よりも83円安くなっていることや、1961年には199円程の差しかない点に、一般とは違って、いわゆる総記ものにおいては参考図書と一般図書の近い価格にあるという現象がうかがえる。

2. 哲学 (100)

他に較べて、参考図書と一般図書との差が大きく、変動も著しい。1954年、1962年には両者の差は400～600円で済んでいるが、1960年には、全部門の中で一番差が大きく、1,192円の差額があった。しかし翌年の1961年には、平均価格が前年の約半分近くまで安くなってしまっている。この様に一般的傾向が捉えられないのは、この分野の参考図書の絶対数が少ないからである。

3. 歴史 (200)

参考図書は高価で、一般図書と常に800円～2,200円のひらきをもっている。この部門における両図書の平均価格のひらきも、1954年から毎年次第に大きくなり、参考図書1冊分の金額でこの部門の一般図書が2冊購入できることになる。この部門の特徴としては、一般図書は安くなっているが、参考図書が相当高くなっていることがあげられる。この傾向は、この部門で年々充実した参考図書が刊行されつつあることを物語っている。

4. 社会科学 (300)

両図書の平均価格の差は100～400円前後で、差額は少ない。つまりこの部門では、参考図書といっても、かなり手軽な安価なものが出まわっているということである。

5. 自然科学 (400)

一般図書の価格は、他の部門に較べ

第7表 分類別一般図書と参考図書の平均価格

年別 分類別	1954	1959	1960	1961	1962
0	631 ^円 (402)	632 ^円 (405)	339 ^円 (422)	657 ^円 (458)	845 ^円 (518)
1	677 (290)	1,314 (387)	1,660 (468)	894 (507)	1,227 (597)
2	1,318 (532)	1,566 (598)	1,894 (544)	1,796 (631)	2,939 (739)
3	640 (355)	542 (424)	631 (424)	759 (508)	1,115 (667)
4	892 (652)	1,353 (878)	1,376 (886)	1,649 (1,080)	1,425 (1,335)
5	679 (395)	1,158 (510)	1,142 (552)	1,586 (653)	1,935 (804)
6	523 (362)	880 (465)	660 (480)	901 (569)	1,167 (703)
7	997 (530)	748 (553)	1,059 (742)	1,096 (763)	1,516 (1,199)
8	377 (325)	668 (493)	775 (387)	546 (512)	517 (569)
9	449 (235)	712 (288)	405 (310)	1,246 (343)	1,727 (407)

注：各欄の数字は平均価格（単位：円）を示すが、（ ）内の数字は一般図書の場合である。なお、一般図書の平均価格は出版年鑑による。

て著しく高価であるが、参考図書はその割には高価ではない。むしろ、一般図書が価上がりして両者の差は次第にちぢまり、500～600円程度である。

6. 工学 (500)

参考図書の価格の半値程度で一般図書を購入することができる。その差は600～1,300円で、毎年他の分野に比して差が大きい。つまり、一般図書は割合に安い啓蒙書、解説書が多いのに対し、参考図書では便覧、法規集、事典など高価なものが多いということである。

7. 産業 (600)

一般図書の値上りに伴って、参考図書の価格も上がってきているので、両者の間には大きな差はみられない。1954年には161円の差があったのが、1962年には464円の差になっている。これは参考図書の値段が、一般図書の値段の約1.5倍強になっていることを示している。

8. 芸術 (700)

差がやや少ない。1954年の両図書の差は467円で、当時の一般図書の平均価格530円に較べて、19割も高くなっている。その他の年はいつも200円～300円の差である。一般図書であっても美術書は全般的に高価であるため、この分野では参考図書が特に高価であるとはいえない。

9. 語学 (800)

1960年の参考図書の平均価格775円の高価格を除けば、一般図書との価格の差が非常に少ない部門である。つまり、この部門は一般図書も参考図書も全般的に値段が安い。参考図書とはいっても学習用の低廉なものがかかなり氾濫しているために、高価な辞書が出たとしても平均価格ではあまり影響しないからである。

10. 文学 (900)

1954年～1960年では、参考図書の価格は安かったが、1961年と1962年とは急激に高価になり、1,200円以上となっている。これに反して、一般図書は、常に他の分野の平均価格よりも格段と安く、200円～400円程度である。これは1961年まで参考図書の内容が1,000円以下のハンドブックや辞典であったが、1961年から、数少ないこの部門の参考図書に3,500円～8,500円という高価な辞典・図譜・索引・ハンドブックがばつばつ現われてきたためである。その結果、文学の部門では、一般図書は物価上昇に伴い幾分かずつ値上りはしているものの、大した変化はないのに対し、参考図書の大部のものが急に最近出版されはじめてきたと考えられる。また他方で考えられることは、内容的に優れたものが出版されるようにな

った為に高価なものが急に出てきたのだともいえる。

逐次刊行物のうちでも年刊ものには参考図書となるものが少なくない。これらの参考図書は継続して購入する必要があるので、別枠の購入費を設けた方がよい。また、レファレンス・コレクション全体に占めるこの種の参考図書の比率を検討する必要がある。このような意味から、以下においては、特に年刊の参考図書に限って、一般図書と同様な面について、その傾向を調査することにした。

H. 分類別の年刊参考書の出版点数

各年間を通してみた場合(第8表参照)に、一般図書並びに一般刊行の参考図書にみられる傾向と同様に、1954年～1959年の間の出版点数の伸びは大きい。しかし、1959年以後は、1959年の出版点数を最高に、その後は余り大した変化はみられない。つまり、年刊参考図書の刊行は1959年をピークとし、以後余り変化もなく安定した出版が行なわれているのではないと思われる。更に、以下に詳しく分析を行なってみたい。

1. 総記 (000)

出版点数は増加しているが、1960年以来40余りの点数を保っている。1959年と1961年との間の伸びが13点でやや大きい。

2. 哲学 (100)

非常に出版点数が少ない。前述の様に、学問研究のスピードが著しくないので、年刊のものをそれ程必要としないのであろう。冊数の伸びなどはみられない。

3. 歴史 (200)

年間5～9冊と多い点数ではないが、コンスタントに出ている。

4. 社会科学 (300)

逐年刊行物の参考図書が一番多い分野である。さらに、点数の伸びも大きく、1959年は109点とかなり多く出ている。この分野も1959年が1つのピークで1960年以来100冊前後に落ち着いている。

5. 自然科学 (400)

出版点数は10～20前後で多いとは言えない。1954年は67点であるが、1960年は15点、1961年は23点と冊数がふえていない。

6. 工学 (500)

社会科学に次いで出版点数が多いが、社会科学はむしろ例外的に数多く、工学はその $\frac{1}{2}$ 程度の点数である。工

参考図書出版の統計的調査

第8表 年刊参考図書の分類別出版点数と平均価格表

年別 分類別	1954	1959	1960	1961	1962
0	32 (2) 740	35 (3) 827	38 (3) 589	48 (2) 665	42 (2) 824
1	400	2 300	3 (1) 633	2 400	6 667
2	7 1,843	9 4,283	5 4,900	8 6,350	8 6,275
3	67 (3) 496	109 (9) 620	113 (6) 654	96 841	114 1,309
4	67 (1) 1,154	13 (2) 733	15 727	23 950	19 1,118
5	26 (1) 756	66 (4) 1,444	39 931	52 (1) 1,284	50 1,319
6	24 (1) 685	52 (8) 788	49 853	39 1,086	46 (2) 1,411
7	12 (1) 464	15 947	12 (1) 645	11 791	15 1,673
8	12 125	7 200	9 211	7 243	8 225
9	1 400	1 250	7 414	2 900	3 500
合計 平均価格	188 (9) 662	307 (26) 850	290 (11) 786	288 (3) 1,070	273 (4) 1,339

注：各欄の上段は年刊参考図書の出版点数，下段はその平均価格（単位：円）を示す。又（ ）内の数字は無定価図書の点数を示す。

学は1959年には1954年の点数の2倍以上になっているが、それ以後の伸びがない。1960年に39点にまで減っているのが目立つ。

7. 産業 (600)

出版点数は工学と大体同じような推移を辿っているが、点数は幾分少なくなっている。しかし、工学で1960年に点数が減少しているのに、産業では別段何の変化もみられない。

8. 芸術 (700)

点数に変化や発展の全くみられない分野であり、各年11～15点を前後している。しかし、価格の騰貴は著しく、1962年には、1954年の3倍以上になっている。これは大部の年刊参考図書が出はじめてきたためであろう。

9. 語学 (800)

歴史と殆んど同じ程度の7～8点の出版点数が毎年続い

ている。この分野も全く増加傾向のみられない分野である。

10. 文学 (900)

哲学と同じ様に、2～3点しか出されていない。1960年の7冊はむしろ例外的である。平均して年刊参考図書の少ない分野である。

I. 主題別の年刊参考図書の出版点数

各年を通じて逐年刊行参考図書が多いのは、1位・社会科学、2位・自然科学であるが、特に社会科学は他の学問分野と比較にならないほど、非常に多くの出版点数を示している。反対に人文科学の分野では、出版点数が少ない。産業についてみると、1954年には出版点数が一番少なかったのに、1959年からは急に増加して、全主題の中で3位を占める出版点数となり、1954年に比しては2倍強の増加となり、50点となっている。だが、これがピークで、それ以後は漸減している。人文科学は、殆んど伸びがない。総記も点数は少ないが、近年増加の傾向にあると思われる。学問の性質から考えて、自然科学や産業の分野が2倍の点数になっていることは、当然の傾向と考えられるが、資料を扱うものとして、好ましい傾向

であると考え。その点、社会科学は1959年を1つのピークとして、それ以後1962年に再び114点になり、大きな差はない。

J. 年刊参考図書の平均価格

1. 年間平均価格の推移

第10表の平均価格の年間推移をみると、ある程度規則的に増加し、1962年には1954年の平均価格662円の約2倍の1,339円に上っている。特にその増加は、1960年～61年と1961年～62年の間に大きな差がみられるが、これから考えて最近急に増加の傾向があるとみることができ

2. 分類別による平均価格（第10表参照）

a) 総記 (000)

他の分類が8年間には相当値上がりをしているのに対

して、総記は1954年～'62年までの期間に100円前後の変化があるだけで、1962年になっても824円で大きな価格の上昇はない。従って、1954年～59年の頃には、他の参考図書と較べてそう安い方ではなかったものが、1960年以後参考図書の中でも1,000円以下のある程度安いままでとどまっている。

b) 哲学 (100)

年刊参考図書の出版点数が少なく、毎年2～3点であるため、ここに出された数字だけでは、高いとか安いとか判断しにくい、やはり400円～600円程度のものと考えられる。

c) 歴史 (200)

例年価格が一番高く、また、その価格の上昇は著しい。1954年には1,843円で1000円以上のものとして、1954年当時数少ない分野であったものが、1959年には急激に4,283円となり、その後1961年には6,350円となっている。この部門では、出版点数は少ないが、大部のものが出ているということになる。

d) 社会科学 (300)

参考図書の中では、高からず安からずという手頃な価格であるが、1954年の496円に較べると、1959年から次第に上昇し、1962年には、2.5倍の1,309円にもなっている。この部門は年刊書の出版点数が多いうえ、1962年の価格についてみれば、社会科学文献の最近のものを集め

第10表 年刊参考図書の分類別平均価格表 (単位:円)

年別 分類別	1954	1959	1960	1961	1962
0	740	827	589	665	824
1	400	300	950	400	667
2	1,843	4,283	4,900	6,350	6,275
3	496	620	654	841	1,309
4	1,350	733	727	950	1,118
5	756	1,444	931	1,284	1,319
6	685	788	853	1,086	1,411
7	464	947	645	791	1,673
8	125	200	211	243	225
9	400	250	414	900	500
平均価格	662	850	786	1,070	1,339

第9表 年刊参考図書の主題別出版点数とその年間総価格

年別 主題別	1954	1959	1960	1961	1962
総記	32 22,200	35 24,800	38 22,400	48 30,600	42 32,950
人文学	32 19,800	34 55,250	36 38,600	30 24,800	40 38,300
社会科学	67 31,750	109 63,250	113 61,500	96 80,750	114 128,250
自然科学	33 17,000	79 85,350	54 47,200	75 87,350	69 88,500
産業	24 15,750	50 34,650	49 43,500	39 42,350	46 62,100
合計点数 合計価格	188 (9) 106,500	307 (26) 263,300	290 (11) 213,200	288 (3) 265,850	311 (4) 350,100

注: 各欄の上段は点数, 下段は総価格 (単位: 円) である。

るのに、128,250円も必要となり、他のどの部門に較べても、最も多くの購入費を要するところである。

e) 自然科学 (400)

1954年を除き1959年以後は、他の部門に較べてかなり安い価格を示している。1956年から1962年にかけて価格が上昇したが、それでも、やっと1,118円である。

f) 工学 (500)

1954年から幾分上下しながら、全般的に上昇し、1962年に1,319円で、1961年頃までは他の分野に較べてかなり高いものであった。一般に図書が値上がりしだした1962年には、1962年全体の平均価格に近く、標準的値段である。

g) 産業 (600)

1954年～1959年には平均価格の600～700円であったものが、1961年からは次第に値上りを示し、1962年は1,411円になり2倍以上に上昇している。全体的にみても、1960年からは3位の高価格を示している。

h) 芸術 (700)

1961年まではかなり安いものであったが、1962年は急に1,673円となり、前年に較べて2倍以上になり、1954年に較べてみると、3倍以上に増加している。1961年までは安かったものが、1962年だけ高くなっているという理由は、これまでになかった2,500円以上の年鑑や、9,000円

参考図書出版の統計的調査

のディレクトリーが点数の少ない中に、大きな比重を占めているからであり、これ以外には大きな変化はないわけである。

i) 語学 (800)

毎年非常に安く、200～300円のものでている。この種のものには實際上、レファレンス・コレクションに加えるには不適当なものが多い。

j) 文学 (900)

語学の分野よりは高いが、全体からみればやはり安いし、1954年と1962年とに値上りが殆んどみられない。但し、1961年の900円が目立つ点である。しかし、2点しが出ていないので、平均を出しても無意味である。

K. 年刊参考図書のタイプ別出版点数

逐次に刊行された参考図書を、前述のように14のタイプに分類し、その出版点数を5つの学問分野において年間別に統計をとった。詳しくは第11表のとおりである。

1. 年鑑類

多く出ている分野は、1位・社会科学、2位・自然科学、3位・総記・産業、4位・人文科学となるが、社会科学の場合は年度によりその出版点数が相当に異なる。例えば、1959年に62点であったのに、それ以後は次第に少なくなり、1962年は45点となり、他の主題分野と数点しか差のない点数におさまってしまっている。しかし他

のタイプからみれば、年鑑類の参考図書出版点数は最低でも12点を示し、全分野に渡って多く出ているタイプであるといえる。

2. 書誌

1位・総記、2位・自然科学、3位・社会科学、4位・産業、5位・人文科学となっている。一般の書誌・出版目録・蔵書目録・文献目録はすべて総記に入れてあるために、総記に10数点の書誌が出ている。総記に続いて2位の自然科学分野では、レビューや専門の文献目録が少しずつ出てきているために、1959年以後10点前後を示すような良い傾向が生れている。特に自然科学の分野での学問の進歩が他に較べて著しいために、結果的に年刊書誌の出版が多くなっている。それに対して人文科学において少ないことは、この分野ではそれ程スピードを必要としないために、図書形態の出版物として出されるものはあるにしても、書誌がつくられる場合は殆んどないからである。また自然科学と並んでスピードの早いと思われる産業の分野には書誌が少ない。

3. 便覧

1位・自然科学、2位・社会科学、3位・産業、4位・人文科学であり、当然のことながら総記にはない。自然科学と社会科学では殆んど同程度に出されているが、1961年だけは自然科学では非常に多く19冊出されている。産業も1959年以後は、8～10点とかなり多くなって

第11表 年刊参考図書のタイプ別出版点数

主題別 タイプ別		総記					自然科学					社会科学					人文科学					産業				
		'54	'59	'60	'61	'62	'54	'59	'60	'61	'62	'54	'59	'60	'61	'62	'54	'59	'60	'61	'62	'54	'59	'60	'61	'62
年鑑	誌	17	24	23	28	25	12	39	21	29	28	37	62	53	40	45	17	18	20	13	18	12	28	25	16	24
書誌		15	11	15	19	16	6	10	8	5	9	2	1	5	2	6					1	1	1		1	1
ディレクトリー					1	1	3	6	2	8	6	6	3	8	7	10	4	4	2	6	6	5	7	8	9	9
資料集成									1				4		3	1					2					
地図集																		2			1					
人名・地名辞典																		2	4	2	4					
便覧						7	3	12	19	14	7	9	15	8	13				3	4	1	4	8	10	8	9
辞典									1	4	1			3	5	2	7	7	7	5	5				1	
法規集						3	6	9	8	6	15	27	29	30	36	1	1				2	5	3	2	2	
図譜						2	1			2							1									
諸表							1			2	3		1		1	1								2	2	

きている。

4. 法規集類

1位・社会科学(15~36点), 2位・自然科学(3~9点), 3位・産業(2~5点), 人文科学(1点), 総記は0, 法規集として六法・判例, 法規関係のものが社会科学に入るために非常に多く, 毎年増加して, 1961年には1954年の2倍の点数になって, その後更に増加している。2位の自然科学では, 公式や規格・特許集で代表される。

5. ディレクトリー

1位・社会科学(3~10点), 2位・産業(5~9点), 3位・自然科学(2~8点), 4位・人文科学(2~6点), 5位・総記(1点)など年々少数ではあるが増加している。

6. 辞典

1位・人文科学, 2位・社会科学, 3位・自然科学, 総記はない。人文科学の辞典だけは毎年5~7点出ているが, 点数は1954年より減っている。

7. 諸表

毎年出ている分野は, 1954年を除いて社会科学にみられるだけで, 産業と自然科学に1~3点ばらばらに出ているにすぎない。人文科学と総記には全く出版されていない。

8. 図譜

総記・社会科学・産業の分野には全く出ていない。自然科学にはほんの1~2点あるだけである。

9. 人名・地名辞典

2~4点人文科学分野の伝記の中にあるだけで, その他には全くない。

10. 史料(資料)集成

自然科学・社会科学に時々出ているが, 自然科学のものは資料集成であり, 社会科学のものは史料集成である。

III. データの利用

以上参考図書の出版にかかわるデータを各種の角度から求めてみたのであるが, 調査年度に限られ, しかも「出版年鑑」だけに基いているので, わが国の参考図書の出版事情とか傾向を完全に捉えうるとは考えていない。しかし, このような調査を手がかりにすることによって, 大体の事情とか傾向ならば捉ええられるはずである。これらのデータはそれぞれの立場で解釈も異なり, 利用される方法も異なるであろうが, 最後にデータ利用の面から2, 3の推測を試みたい。

A. 図書館における新刊参考図書購入計画

1. 全体的な出版点数からの推測

一般の傾向として, 一般図書の出版点数増加に伴って参考図書の出版点数も増加しているばかりでなく, その増加率は近年次第に高まってきている。これから次第に参考図書が全出版物の中で占める率が高くなり, 一割以上になるのも遠いことではない。具体的に出版点数(第1表)をみると, 1961年に年間915点であったから, これからは年間1000点以上は確実に出版されるであろう。図書館では, この様な結果から考え, 受入れるべき全体書籍に要する手間, スペース, 消耗品等について, その一割見当を参考図書にあてる必要がある。

2. 参考図書の平均価格についての推測

参考図書の価格は年々上昇している。殊に1959年以後にみられる上昇率は顕著であり, 価格が下がることは全く考えられない。1960年には平均価格は1,000円を越え, また1961年から62年にかけての急激な上昇傾向から推して, 1964年~65年には平均2,000円台に上ってしまうだろう。また, 参考図書の価格は一般図書の価格の2倍程度で, 今後かなりの期間続きそうである。つまり, 一般図書も参考図書も年々値上がりしているわけである。しかし, 価格上昇は物価上昇に伴う現象として現れた傾向だけでなく, それ以外に参考図書そのものの質, 量に変化が生じてきた結果であろうとも考えられる。一面では, 大部のものが出はじめたこと, 他面に於ては内容的に優れたものが出はじめたことの2つの原因を推測することができる。とにかく今までの我国の参考図書の出版状況は, アメリカのように発達し優れた二次文献を扱う商業出版社(例えば, H. W. Wilson 社, Bowker 社)をもつ国とは異なり, 相当の遅れをとっていた。従って日本に於て以上の様な原因によって価格上昇という結果をもたらしたとみるならば, こうした値上りはむしろ好ましい現象で歓迎すべきことであるとさえ言える。

B. 学問分野によって特長づけられる点

1. 総記

出版点数に大きな変動もなく, 今後数年間は80点台を保ち続けるであろう。だが, 定刊書がその大半を占めているため, 別枠予算として, 毎年欠けることのないように完全収集を行なうためには33,000円以上の予算を必要とする。この分野は, 特に図書館としてその専門分野にかかわらず収集する必要がある分野である。

2. 人文科学

出版点数としては、近年になるに従って減少の傾向にあるが、1冊あたりの価格の上昇率が非常に高い。これは、点数は少ないが近年大部な参考図書が出はじめてきたということの意味だと思う。逆に、新しい情報として要求される年刊参考図書類は幾分点数が増加し、そのための予算として、40,000円程度とっておく必要がある。一般参考図書の中には、2万円以上のものもあるので購入には熟慮が必要である。

3. 社会科学

出版点数は多いが、その年別による変動が大きい分野である。1959年以後250点台を前後しているが、今後急激に点数が増加するとは考えられない。しかし価格は相当上昇し1冊あたり1000円以上は必要である。この分野には年刊参考図書が非常に多く、このため予算だけでも年々急激に上昇し、1962年に128,250円必要であったから、今後すぐにも15万円を超過するであろう。

4. 自然科学

近年になってから急激に出版点数が増えてきた分野であり、今後も学問の性質から考えて相当数に上っていくと考えられる。1965年には年間400点以上になると思う。また年刊参考図書も増加する傾向にあり、他の分野と較べて、最も幅のある予算を組むことが必要ではないかと思う。1962年現在年間88,500円の予算を必要としたが、この2倍の金額を必要とするのも遠くないのではなからうか。

5. 産業

出版点数増加は急激でないが、年刊参考図書だけをみると、相当数を占め、年々増えつつある。産業部門は点数の少ない割に一冊あたりの価格が高く、総記や人文科学の参考図書より1.8倍位高く、年刊図書に年間6万円以上必要である。この分野だけで10万円を必要とするようになるのも近いであろうと思う。この分野は特に年刊参考図書の重視されるところである。

以上、いずれも各部門の新刊の参考図書をすべて購入する場合を想定して予算額を算定してみたのであるが、いかなる図書館においても、すぐれたレファレンス・コレクションをつくる場合に、これらの参考図書を網羅的に購入するようなことはない。上述の金額を一応の目安として、どの程度の参考図書を選択購入するかについて具体的な検討をする必要があろう。

結 語

統計調査の分析・推測を行なってみて、一番強く感じることは、参考図書の不足が叫ばれているわが国においても、各学問分野に適した形をもってバラエティーに富んだ参考図書が次第に多く出版されるようになってきたということである。つまり、常に新しい正確な情報を必要とする自然科学や産業の分野では、参考図書もスピードを重視したタイプのものが多くなり、逆に哲学・文学等は、ますます伝来の学問を集大成する形に向っていく。これと同時に、特殊参考図書の刊行を促すことによって、我国における参考図書の充実を計ることができよう。

但し、図書館界では出版界の出版事情のなりゆきにただ追従し、望ましいタイプの出現を待つだけであってはならないはずである。多くの図書館で共通に必要とされている参考図書も少なくないはずである。そのような参考図書に対する要求は利用者を代表して、確信をもって出版社に出版の要請をすることも可能である。また、それぞれの図書館の性格に応じて必要とする参考図書は極めて多様であろうが、それらの要求を具体的に明示するためには、参考質問の解答記録、利用者の個別的な要求に基づかなければならない。

出版社のすべてが営利のみを追求しているわけではない。図書館が充分に納得できるような要求を出すならば、多少の犠牲を払っても良心的な出版企画にすんで乗り出す出版社もあるはずである。また逆に、タイトルだけ立派で内容の伴わない粗悪な参考図書に対しては、図書館が毅然たる態度をとってこれを拒否することも、わが国の出版文化を向上させる上に有効ではなからうか。たとえ現在ではその影響力は弱いとしても、図書館が結束して当るならば、必ずや出版文化を一つの望ましい方向に導びくものと信ずる。

本稿は、筆者の卒業論文「参考図書の研究」より統計的調査の部分を抜粋して、補筆したものである。なお、図表は紙面の都合で割愛した。(図書館学科第14期生)

- 1) 改訂版、東京、日本図書館協会、1965.
- 2) Mudge. I. Reference works and reference books <Winchell, C.M. Guide to reference books. 7th ed. Chicago, A.L.A., 1951> p. xvi.
- 3) 東京、理想社、1955. 259 p.